

麗澤海外開発協会 活動の歩み

1971年にスタートした「財団法人麗澤海外開発協会」の活動は、2001年で30年を迎えました。今日まで、ラオスにおける養蚕開発事業、コスタリカにおける花卉栽培試験事業、またネパールで活動するNGO団体「ティテパティよもぎの会」への支援など、発展途上国を中心にさまざまな事業を行い、国際社会に貢献して

きました。

急速な発展を遂げる人類社会の繁栄の裏には、まだ多くの貧困と政治不安に苦悩する発展途上国の姿があることを、われわれは見逃すことができません。こうした深刻な諸問題に取り組んでいる発展途上国に対して、わが国として、また世界の平和、人類の幸福の理想に邁進するわが団体としては、文化、経済面の発展に協力の手をさしのべることは、当然果たすべき義務というべきでありましょう。

わが団体は、それぞれの時代、それぞれの国の様相とどう関連してきたのでしょうか。これまでの30年間を4期に分けて振り返ります。

第1期

財団設立までの経過

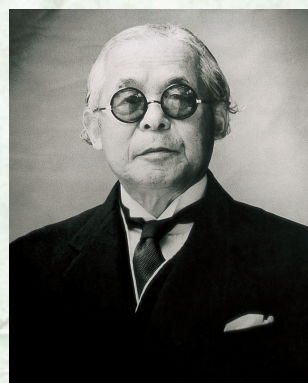
1964—1971.3

財団法人麗澤海外開発協会は、1971年3月16日に外務省より認可を受け、設立されました。しかし、世界の発展途上国における文化、経済の発展に協力するため、人材の育成と技術指導を行い、もって世界の平和、人類の安心と幸福に寄与しようという目的にもとづいた活動は、すでに1964年、ラオス王国の首都ビエンチャンにその一石が投じられており、その数年来における活動が現地の人たちはもとより、わが国の政界、財界からも称讃を受けておりました。そこで、さらに組織的、計画的な施策にもとづいた現地における技術指導などの産業面の協力はもちろん、生活態度、思想などの精神生活面においても、目的達成に努力するために法人発足の運びとなりました。

ラオスでの調査は、麗澤大学の奥平定世教授（1902～1984、

財団設立時の常務理事）によって1959年に始まりました。奥平教授は、以後、毎年ラオス各地を踏査し、1964年の初めにラオスの首都ビエンチャンの商工会議所会頭カンバイ・ピラパンデ氏から農業開発指導の要請を受け、レイタク・カンバイ農場を指導開発する話し合いが両氏のもとで成立しました。同年6月、廣池千太郎、長谷虎治の両氏が奥平教授とともに現地を視察、同年秋に廣池学園から2名が現地に派遣されました。

当時、財団はまだ成立せず、有志の浄財によって桑苗の栽培や試験的養蚕活動が始まり、また農機具、肥料、種等の物資支援も始まりました。この業績は高く評価され、1968年に廣池学園の廣池千英理事長*（当時）は財団設立の意志を発表、有力出力、有財出財、人心の開発と救済への積極的方法が示されました。しかし、その8月、廣池千英理事長は急逝され、ラオス開発は理事長の遺訓として残されたのです。この財団は廣池千英理事長の一つの大きな遺産ともいえるでしょう。



* 廣池千英（ひろいけ ちぶさ）

（1893～1968）

モラロジーの創建者・廣池千九郎の長男として京都に生まれる。東京帝国大学法科大学政治学科を卒業後、富士瓦斯紡績株式会社、財団法人協調会参事を経て、財団法人道德科学研究所第2代所長、学校法人廣池学園理事長、麗澤大学学長、麗澤高等学校校長、麗澤瑞浪高等学校校長等を歴任。



東京・帝国ホテルで開催された麗澤海外開発協会の設立披露パーティー（1971年5月24日）。挨拶されるのは、チャオ・ニット・ノーカム駐日ラオス大使（右）